

北満哀歌

小堤老人クラブ 須田 鉄造 81才

一、 喚呼の声に送られて
妻子と共に満州へ
出でしは昭和の十五年
師走も暮の頃でした。

六、 千里広野に捕虜の身は
飢えと寒さにしのび泣く
骨までしみる苦しさに
生き地獄とはなりにけり。

二、 国に残れる母妹
教え子達の旗の波
鎮守の森にこだまして
心に涙うちかくし。

七、 酷寒零下三十度
冷たく冴えた月の夜は
武装解除の銃剣に
又も氷の花が咲く。

三、 関釜の船路鴨緑江
渡ればすでに銀世界
奉天すぎて新京と
異国の地をば踏みにけり。

八、 空に写るは日のみ旗
夢に浮ぶは国の母
いとし妻子の顔と顔
悲憤の涙たがためぞ。

四、 暑さ寒さが身にしみる
大陸の地に幾星霜
とつ国民と交わりて
親子は共に生きにけり。

九、 雨も嵐も乗り越えて
奇しくも命長らえて
苦難の大陸あとにして
別れを告げる胡ろ島や。

五、 思えば悲し二十年
戦い敗れ捕われて
シベリヤ遥かひかれ行き
今日はあの山この川と。

十、 空の曇りも今日晴れて
引揚船に浜千鳥
今ふみしめる佐世保港
あすの我が身に幸あれと。

茨城県総和町(現古河市)

総和町老人クラブ連合会

創立三十周年記念誌

「平和の祈り」への寄稿

平成六年十月十三日発行